

## はじめに

YANAGAWA Hidetoshi

梁川英俊

本書は2011年1月29日に鹿児島大学法文学部人文学科ヨーロッパ・アメリカ文化コースの主催で行われたシンポジウム『「ケルト」に学ぶ地域文化振興』の報告書です。

若い学生たちにどのようにして西欧文化への理解を深めてもらうか？ そう考えて私たちはシンポジウムのテーマとして「ケルト」を選びました。

なぜ「ケルト」なのでしょう？

世界史にあまり関心がない人でも、紀元前の昔、ヨーロッパ大陸には現在「ケルト語」として分類される言葉話す人々が広範囲に住んでいたという話ほどどこかで聞いたことがあるでしょう。ローマによる征服や異民族の侵入によって、この言語を話す地域がいつしかヨーロッパの周縁だけになってしまったという話も、たぶん知っているのではないのでしょうか。

この地域とは、具体的にはアイルランド、フランスのブルターニュ、イギリスのウェールズ、コーンウォール、スコットランドです。そしてこれらの地域は、「ケルト諸地域」、「ケルト諸語文化圏」あるいは「ケルト文化圏」などという名称でしばしば一括されます。

鹿児島大学法文学部人文学科ヨーロッパ・アメリカ文化コース主催  
「ケルト」に学ぶ地域文化振興

「ケルト」に学ぶ地域文化振興

初編の文化

日時 2011年1月29日[土]  
10:00～18:00(9:30開場)

会場 鹿児島大学 稲盛会館

参加費無料

鹿児島大学法文学部人文学科ヨーロッパ・アメリカ文化コース  
主催 鹿児島大学法文学部人文学科ヨーロッパ・アメリカ文化コース  
共催 鹿児島大学法文学部

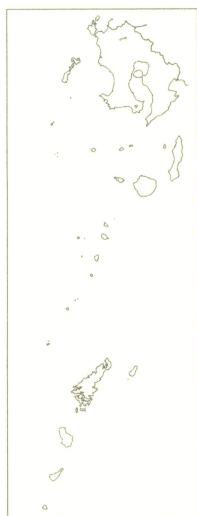
第1部 10:00～12:00  
「ケルト」に学ぶ地域文化振興  
第2部 12:00～18:00  
「ケルト」に学ぶ地域文化振興

鹿児島大学法文学部人文学科ヨーロッパ・アメリカ文化コース  
〒890-0055 鹿児島県鹿児島市下元町1-1-1  
TEL: 099-238-2111 FAX: 099-238-2112

シンポジウムのポスター



ケルト諸地域 (<http://www.celticleague.net/>)



鹿児島県全図

この地域をシンポジウムのテーマとして選んだ理由はおもに3つあります。

まず、すでに申し上げたとおり、この地域は言葉が独特です。ケルト諸地域は、アイルランドを除けば、いずれもフランスやイギリスという国の一地域、一地方にすぎないのですが、にもかかわらず英語や仏語とは違った独自の言葉を話す、あるいは話してきた地域です。

日本人は、一つの国には一つの言語しかない、と、つい考えてしまいがちです。けれども、これは必ずしもどの国でも通用する常識ではありません。英語の母国イギリスや仏語を大切にするイメージが強いフランスのような国にさえ、英語や仏語とは違う言葉が残っている地域があるのです。まずはこうした事実を知って欲しいということがあります。

つまり「ケルト」に目を向けることは、私たちにはすでに親しいヨーロッパの、あまり知られていない意外に複雑な一面を知るための格好の機会になるのです。

第二の理由は、この地域と私たちが住む鹿児島との類似性です。左の地図を見てください。ケルト諸地域はヨーロッパの西の端にあります。実際、この地域はしばしばwest endとかland's endなどと呼ばれます。つまり「ケルト」とはヨーロッパの〈辺境〉なのです。

私たちの鹿児島県もまた日本の西の端にあります。「さつま」という地名自体、もともと「狭詰」あるいは「狭端」、つまり狭まった場所とか奥まった場所という意味と考えることができますし、「大隅おおすみ」もまた端の場所とか奥地おくちという意味でしょう。つまり私たちが住む場所もまた日本の〈辺境〉に位置するという点で、ヨーロッパの西端にあるケルト

諸地域と大変によく似た地理的条件にあるわけです。

しかも、この二つの地域は大変に「半島」や「島」が多い地域でもあります。こうした地理的・地形的な類似性のゆえに、この二つの地域はその抱える問題にも似た点が多くあると考えられます。つまり「ケルト」を知ることは、私たちが住む地域の問題を知ることもつながるのです。

第三の理由は、このケルト諸地域が地域文化振興という点で大変に活発な場所であるということです。すでに指摘した言葉における大きな違いは、この地域に独自の文化的アイデンティティをもたらしました。そしてこの独自性はいまではこの地域の活性化を支える大変に重要なファクターとなっています。

日本では「文化」といえば、長く中央の目新しい文物のことで相場が決まっていました。そのなかで、地方はしばしば「文化果つる地」として扱われ、自らの土地の歴史や文化に誇るべき価値を見出すことすら難しい状況にありました。

しかしその日本でも近年では「地方分権」の必要性が叫ばれ、地域の「文化力」が問われています。中央のマネではなく、自らの地域の文化的特性を大切にしようという姿勢は、今後ますます重要になってくることでしょう。その意味で、ヨーロッパの〈辺境〉にありながら独自の文化力を発信し続ける「ケルト」は、私たちにとって大いに参考になるといえるのではないのでしょうか。

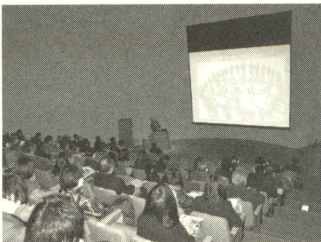
シンポジウム『『ケルト』に学ぶ地域文化振興』は、このように西欧について学びながら、かつその知識を自分たちが住む地域に役立てるという二つの目的を明確にするために、全体を二部構成としました。

第一部は、ケルト文化圏を構成する5つの地域の代表的な文化関係者の講演です。ブルターニュからタンギ・ルアルン氏、ウェールズからメイリオン・プリス・ジョーンズ氏、コーンウォールからダヴィス・ヒックス氏、スコットランドからロバート・ダンバー氏、そしてアイルランドからネッサ・ニヒネーデ氏をお招きして、それぞれの地域文化振興の試みを話していただきました。各講演者の詳しいプロフィールについてはそれぞれの報告の最初に掲載しましたが、さすがに各地域の文化活動に深く関わっていらっしやるだけあって、とても興味深い話を聴くことができたと思います。

第二部は、「〈文化力〉で地域を活性化する！」と題した日本人によるパネル・ディスカッションです。第一部の内容を受けて、今度は日本で、あるいは鹿児島で、どのような地域活性化の試みが可能かということについて、3人の学術関係者と2人の「地域おこし」関係者にさまざまに討議してもらいました。パネリストは、ケルト学の原聖氏、方言学の木部暢子氏、歴史学の藤内哲也氏、大分県豊後高田市で「昭和の町」推進活動に携わる建築家の安藤剛氏、鹿児島県こしき甕島でアートプロジェクトを主催している平嶺林太郎氏です。

シンポジウムは昼休みを挟んで8時間に及びました。

本書が目指したのは、このシンポジウムの内容をできるだけ忠実に再現することです。当日使われたパワーポイントの映像の多くを省かねばならなかったのは残念ではありましたが、そのほかの点ではほぼ目的を達成することができたと自負しています。この本を手にしてくれる皆さんに、本番の熱気が少しでも伝われば幸いです。



会場風景

日本にとって、これまで西欧とはもっぱら先進的な文化を学ぶところでした。旅行で訪れる場所もニューヨークやロンドンやパリといった大都会が中心だったといえるでしょう。しかしこれからの国際交流では、西欧との等身大の付き合いが重要になってくるはずで、なかでも「地方」と「地方」の交流はますます大切になることでしょう。海外においても「地方」に注目し、そこを通して自分の住む地域を考えてみる。[国際関係]を「地域関係」を軸に考えることができるようになれば、私たちの外国との付き合い方もずいぶんと変わってくるはずで、

本書がそのためのささやかな一歩になれば幸いです。